

物語

沙漠のクリスタル

脚本 手塚治虫

アトム

アトラス

リビアン

ワルブルギス伯爵

山師スミス

盗賊たち

給油所の男たち

どれいたち

クリスタルのロボット

○1

沙漠 (北アフリカ)

砂あらしが吹きすさみ、太陽がカツと照りつけている。

砂の上に散乱する輸送機らしきものの破

片、積荷や、エンジンの一部、尾翼など

が悲劇を物語っている。

——そして、その片隅にころかっ

トム、ピクリともしない。

○2

沙漠の空

不気味な鳴声とともにハゲタカが舞って
いる。

03 塗落現場

アトム、ぎこちなくおき上る。

すさまじい羽音でハゲタカがまい上る。

よろよろ立ち上って見渡す。パイロット

のからだはハゲタカが二、三羽止って

るのを追いつけず、パイロットをかがん

で調べるが、死んでいるのをたしかめ、

あきらめをよこすように上空をぼんやり眺める。

突然、砂丘の上はうさくさしいアラブの

ふくめんをたて、八人の男が馬に垂つ

て理やれ、戦体の散乱する中へのりこむ

馬からおりて、積荷をあさり始める。

乱暴に刀で荷物を切りきざみ、めぼしい

ものを掻っ払う。

ひとりかアトムを見つ、あうあうしく

けり倒す。エネルギーの足らないアトム

は、されるままになっっている。

5

4

砂の上にひっくり返ったアトムが目か、
リズミカルに走り出す。

男たち、キョツとしてそれを見つめ、ヒ

ソヒソとささやきあい、奪ったものさま

とめて馬に乗って引き揚げていく。

ふたたび静まり返った墜落現場。アト

ムのみ目をげが異様に明滅している。

04 沙漠の別の場所。

れいの盗賊団が馬でやってくる。

たしぬげに目の前に、まっくろなマント

に身を包んだ奇怪な大男が馬に乗って立
ちはかめる。

男 「待て！」

キョツとする盗賊たち。

男 「かっぱらって来たものを全部こっち

へ渡せし

盗賊たち、顔を見あわせる。

男 「もたもたあるな、渡せかいのちんげ

は許してやるし

盗賊たち、刀をぬいて男に突進する。

男は奇妙な剣をぬいて、あっというまに既
たちまなび倒す。

男は馬をおりて、盗人を捕らえ、盗人の胸を
きずを造った。盗人の一人の胸をくらむつかんで
ひきよせる。

男 「ロボットがひとりいれたはずだ。こと
しものロボットだ！どこへやっただ？ど
うしたと訊いてるんだ！」

男 「うっちやって来たよ」
男 「うそをつけ！」

男 「うそじゃねえ、ロボットなんかか
さぼるかげで、大金にもなるねえから
待って来なかつたんだ」

男 「ごくつかいめ！」
男ははるかにこの砂の上へめり込んで
息絶える。

男は馬にとびのり、いそいでかけ去って
いく。

05 砂丘

ものすざい砂あらし。

— よろよると歩いていくアトム。目が先
りつづけている。砂丘をすべりおちる。

何度か倒れ、やっと起きよって、さらに
よろめき歩く。砂あらしの中へ消えていく。

〇 給油所の前

沙漠のハイウェイの中にポツンと立っている
白い壁の建物。居酒屋をかねたスタンド

である。

砂あらしは止んでいる。

大型トラックが走って来て、止る。

⑦ 給油所内部

五、六人の男が酒を飲んでいる。

トラックから降りて来た運転手が、かか
えて来たアトムを、床にほうり出す。

ドライバートコくんはロボットが道に倒れて

ヤがったせし

女の一人が近づき、アトムの顔を見る。

む。

A 「こいつはガキだし

B「ガキ」って、口ホットじゃねえか」

C「なんであんな所に居たんだろう」

A「ガス欠——じゃねえエネルギーが切れ

ちまったらア、たれかエネルギーもくれ

とやんならへコツコツと胸（アタマの）をたたくし

C「冗談じゃあえ、エネルギーカセットは

高いんかを」

スミス「おれが払ってやろう」

——店の奥からの「そり覗れん神士——とん

うより、山師的な男

B「こりやアスミスの旦那！」

スミス「おい、おやじ、この口ホットに、

カセットをひきつけてやれ！」

店の主人「へい」

——店のおやじが、棚の中からカセットを

とり出し、口ではこりをふいてから、アト

ムの胸をあけて中へはめこむ

ぽんやり目をあげるアトム

C「やあ、あわれな口ホットさんがお目ざ

めかせ」

きよろきよるとみんなを戻す。

アトム「ここは……ここは、どこですか」

ドライバー「ここはな、カラハリ沙漠の

五三地区だ。バジリコちゆう所よ」

アトム「バジリコ……バジリコ……そうか

、思い出しな！へち上るしぼくは、たし

か飛行機に乗って——バジリコへ向って

とんがたんだ。そしたと、急にたんなかに

驚かれた、飛行機が爆発して……おっこ

ちちゃった……沙漠のまん中たった……

みんな死んじやって……それからあと

は、ぜんぜんわかんない」

B「このいつの話を聞いと、みんなが遭難

したみたいだぜ」

スミス「身の上なんかどうかっていい！

おいロボットのことさう。おまえのエネル

ギはおれが買って入れてやうたんだぞ

、ありがたく思え！」

アトム「あ……ありがたう。おじさん」

スミス「礼をいやア済むと思ってるのか？

買ったやっ代金の令石は、おまえは働
くんが！ このおれの石めにた！ いや
石とはいわさるを、このうすきたねえづ
りキ人形めし

アトム「ぼく、みはとすれがいいんで
すかし

スミス「よしよし、ものわかりがいいこそ
うん、いいか、このおれりの砂地を堀っ
て、石油の鉱脈を見つけるとか、石油
このほとんどなるものか知ってるな？」

08 走るスピードの上

スミス「へ運転しながら、このおれりに
は、石油の大鉱脈がガマンとあるはずな
んが、世界は穢された、さいごの大油田
地帯ってわけよ！ おまえはその石油を
見つけるまで、堀って、また堀
って……」

スミス「シエス42A」

アトム「待って下さい、ぼく、その石油を

探しに来る人たちが、かならず行方不明

になるつてきいて、国際警察の人たちと
しらべにきたんですし

スミス「アトム、なまのまなこととてい

やがって、一車をとめ、砂の上へ立つ

し 危険は承知の上だ、銃脈があたれば

億万長者にならう。さア仕事を、ア

トム、とづかれて歩く、手はいかに、

〇 〇 そこのらと握つてみるし

アトム「トニネル掘るの？」

スミス「モクラじやぬぞ、たて穴を掘る

んか、さつさとやつてみるウスノ口めし

アトム、とび上つてはアトム、手を車

輪のようにまわして砂へとびこむ。

あつげにとられるスミス。

遠くの砂地からとび出すアトム、スミス

目をやくり

アトム「もつと？」

スミス「アトム、とんこん握れ！」

アトム、またとびこむ。

〇 9 地下

すどいスピードでたて穴を掘っていくアト
ム。

地上へ出る。

再びもぐる。 どんどん深くもぐっていく。

バシヤツとまっくろな液体の中へおちこむ。

アトム っる油かしら……る油らしいぞ。

アトム 上へ向って猛スピードでバツク。そ

の穴からる油がよってくる。

地上へとび出す。 つづいてる油が噴出す

る。

アトム っ見つけたあ……おじさん！

ジークのタイヤのあと。

アトム ヒンで行く。

ジークが紙のようにひしやげえ、くずぶ

っている。

アトム びくくりして見まわす。

サボテンの上には、ぐにヤリと曲つたスミ

スの無味な死体。

アトム ったひへんが……

010 給油所の前

アトムがスミスまかついで茫然と立っている。

給油所がはげしくもえている。

アトム「なにがあつたんぢやうし

一面に馬のひずめのあと。

アトム「……なんかに驚かれたんぢや……こ

れや……ロボットの馬の足あとぢや」

アトム、スミスをおろして、足あとをたど

って行く。

011 沙漠

背のひくいサボテンのしげみの間の砂地をたどって行くアトム。

012 小高い溪谷の底

岩まじりの荒涼とした谷底を、アトムが歩

いている。

見上げる。

スロープを登っていく。ヘビが岩かげから

顔を出し、アトムを見送る。

013 溪谷の上

アトム立って見渡している。

アトム「ここで消えてるぞ。空へとび上る。」

「瓦み瓦みか」

はるか彼方まで、まは沙漠がづく。

アトム「げげんな顔。」

アトム「そんなか動いてるぞ。」

とび上る。

014 巻

とくでいくアトム

0 耳をすます。

アトム「へんな音がする。」

015 沙漠

アトム「旋回して、砂の上へおり立つ。」

砂がゆつくり回っている。

アトム「驚いてとびのく。あわてて退却して。」

岩めげにかくれる。

砂から巨大なクリスタルの光が現れ、除々

に回転しながら姿をみせていく。

その輝きと不気味さ。

クリスタルはすっかり姿を現わし、さう

に空中に浮んでいく。

地上30メートルのところにはアツカリ浮かんで
いる。砂の上には大きな穴があいた

じつと動かないクリスタル。アトム驚きの
目で見つめる。

中
C
M